
記憶喪失んでれ

kei_star01

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

記憶喪失んでれ

【Nコード】

N1427B

【作者名】

kei | s t a r 0 1

【あらすじ】

よくある奇跡恋物語です。タイトルまんまです（笑

いつもの空、いつもの景色、いつもの帰り道…そして隣にいるのはいつもの女の子。

『まったくあんたに付き合ってるとうるくなことないわ!』

「だから悪かったって何度も謝ってたんだろ!？」

『誠意が足りないの!』

いつもの会話、いつもの怒鳴り声…変わらない日常………なんて幸せなことだろう。

「なあ、どうしたら許してくれるんだよー!」

『なら、キスして…』

「へっ!?!?」

『バーカ!今の顔超ウケる』

そういつて軽く俺をこずいてケラケラ笑う。

友達以上恋人未満、そんな関係の俺たち…それが俺はちょっと悔しくて…

「もうしらねえ、先帰るからな!」

と、俺は駆け出した。

ちよつとした不注意だった。十字路に飛び出した俺の横からトラックが走ってきていた。

『危ないっ!!!』

ドンッ!!

俺を突き飛ばし際あいつが呟いた…

『あんたといると本当にろくなことないわ…』

「瑠璃いーーーー！！！」

「頭部を激しく強打しています。最悪、二度と目覚めることがないかもしれません…。

もし目覚めたとしても何かしらの障害が残ることは覚悟していて下さい…」

すべて俺のせいだ…！！！！俺が、俺があの時……………

それから半年の月日が経っていた。

今日も俺は瑠璃に語りかける…学校のこと、部活のこと、今日あった出来事をすべて。

それが俺の日課になっていた。償えない罪の罪滅ぼしをしたかったのかもしれない……

そして、あの日がやってくる。

俺は駆け出していた…そう、瑠璃の意識が戻ったと連絡があったからだ！話によると奇跡に近い確率らしい…

「神様…！！！！」

無我夢中で病室に駆け込む！

「瑠璃っ！！」

……しかし現実にはもっと残酷で、神様というものはいないのだと思いきらされた。

「初めまして。あなたも私のことを知っている方ですか？？」

瑠璃は過去をすべてなくしてしまったのだった……

「言語障害、運動障害一切なし…日常生活には問題ないと思います。ただ記憶のほうは……戻らないと思われます。」

瑠璃はあの時重い脳挫傷を起こしていて、助かったことすら信じられないことだったそうだ。

しかも覚醒するという奇跡をまた起こしている。担当医は神様は存在するのだと興奮していた。

…だが俺はそうは思えない。

17歳の少女が記憶をなくし、学校にも行けず、ただただ生きるだけという人生を送ることがはたして幸せなのだろうか…

それから俺は学校や通学路、学校の友達…色んなことをして瑠璃の記憶に語りかけた。

だが、瑠璃の記憶が戻ることはなかった。

そして俺は、瑠璃の記憶を思い出させるため、あの場所へ向かった
……

「ここ、なんか思い出さないか？」

『……ごめんなさい。』

「謝らなくていいよ。別に瑠璃が悪いわけじゃないんだから。」

……ここはどんな場所なんですか？？」

…ズキン！！

胸の奥に鈍痛が響いた。

「ここは………」

『……？？』

「ここは、瑠璃が……瑠璃が俺をかばってくれた…事故現場だよ。」

『事故…？』

そう、両親の意向で瑠璃には事故にあったこと、その経緯などすべてのことがふせてあった。

つらかった思い出など教えなくていい、と。

しかし俺は我慢ができなかった。言えば記憶が戻るのではないかと…いや、ただ罪悪感から逃れたかっただけなのだ。

瑠璃の過去を奪ってしまった罪の…

『事故？誰か事故にあっ…』

「違う！瑠璃、お前が事故にあったんだ。俺をかばってくれたじゃないか！！」

『私が…事故……？』

「そつだ瑠璃！思い出してくれ！！お願いだから…」

『あの……私……私……痛っ！』

「瑠璃？どうした瑠璃！？瑠璃………」

それから意識を失った瑠璃は3日眠り続けた。

俺は両親に経緯を伝え謝ったのだが、咎められることはなかった。しかしそれ以後、記憶を戻らせようと脳にストレスを与えることは禁じられた…

ただ自発的に思い出すのを待ち続けるしかなかった。

俺は今、瑠璃の家庭教師をしている。

瑠璃が学校に行きたいと言い出したからだ。

すべての記憶を失ったからだろうか、瑠璃はスポンジが水を吸い込んでいくように凄く早さで学習していった…

そんなある日。

『ありがとうございます。この調子なら来年から学校行けますか？』

「そうかもしれないな。」

いつものように帰り支度をしている俺に突然瑠璃が言った。

『……………ごめんなさい。』

「何が？」

『部活、出たいですね。私、お母さんが話してるのを聞いちゃったんです。インターハイに出れる有力候補だったって…』

「……………瑠璃。」

『インターハイって全国大会のことですよ。何より走るのが好きだったって……それなのに私のせいで…本当に…』

「馬鹿!!」

ビクッ!!!

「…ごめん、大きな声出して……確かに俺は走るのが好きだよ。インターハイってのは言い過ぎだと思うけど。ただ、俺は走ることより……」

『……………?』

「走ることより、瑠璃のことが好きだから…瑠璃と一緒に居たいんだ。力になりたいんだ。」

『……………』

瑠璃の瞳から大粒の涙が流れていった。それを拭いながら俺は続けた。

「泣かないで?それとも、俺なんかじゃダメかな??」

フルフルフル……………

「よかった。これからもずっと瑠璃の傍で、瑠璃のこと守り続けるから……」

『……………あ…ありがと、……………じ…ずい…ます……………』

それから半年の月日が流れた。気が付けば俺は高校2年生になっていた。

今日も瑠璃の家庭教師を終え帰ろうとしていたら、急に散歩に行こうと瑠璃が誘ってきた。

『桜……………綺麗……………』

記憶を失ってから瑠璃はよくこの公園にきたがる。
何か思うところでもあるのだろうか……それが記憶に繋がれば……いや、もういいんだ。

「そういえばこの公園……懐かしいな……」

『えっ？……その話聞きたいです……』

しまった。記憶に関することは……

「お願い、あなたと私のことをもっと知りたいんです。あの日、私のことを守るって言ってくれたから……だからあなたのことを……お願いします。」

……これくらいなら大丈夫だろう……そう思い俺は話し始めた。

「小学生のときの話。あの時もこんな風に桜が咲き乱れててさ。ここで結婚式ごっこやったんだよ。それで……」

『けっこんしきっておっきくなったらもっとおっきなとこでやるんだって！』

「おっきなとこってどこ？？」

『……うちゅう！……！』

「笑っちゃうよなあ！あの頃は怒ったり殴ったりしなくて、スキ～♪って言うてくれててなあ……」

その時そつと瑠璃の手が俺の頬を拭った。

『涙……』

俺は泣いてしまっていた……あの日、もう二度と泣かないと誓ったのに。

『昔の私はわからないけれど、今の私はあなたのことが好きです。』
そういつて瑠璃は優しく抱き締めてくれた…

『あなたが私のことを守ってくれるなら私もあなたを守ります。あなたが私を愛してくれるなら私もあなたを愛し続けます。』

「……………あ、ありがとう。」

涙がとめどなく溢れてくる。まるであの日からたまりにたまっていたすべてをはき出すように…

「……………ありがとう…俺も瑠璃が好きだ……………あの日の事故からずっと、いや出会ったときから気付けばずっと、ずっと好きだった…」

抱き締めてくれている瑠璃の腕がとても優しく……………それがとても切なくて……………

「……………ご…ごめん。あ、あの時、お、俺を…守って、ぐれて…だけど、そのせいで……………る、瑠璃が……………ご、めん、ごめんな…さい……………ごめんなざ……………」

ずっと言えなかった言葉、真っ先に伝えるべきだった想い……………それがただただ溢れていった…

その時、風が吹いた…桜が舞い散り、雪のように辺りを真っ白に染めた……………

「……………ごめん。ごめんなさい……………これから償うから……………ずっと守ること、愛し続けることで……………」

『そんなに謝らないで……………あの時は私が助けたいって、あなたに生きて欲しいって思ったから…気付いたら飛び出していたの……………だけどそのせいであなたをこんなに傷つけ……………』

「……………瑠璃??…」

『…………？』

「今…あの時って…………もしかして、記憶が…」
「…戻ったわよ…今全部思い出した…………」

ガクッ…ストーン

『っ！？ちよつと！どうしたの？！』

「嬉しいとかびっくりしたとか……………いろいろあってなんか腰が抜けた…」

『ぷっ！バカね、何やってるの？』

ああ、この笑顔だ…なんだかすごく懐かしいような……………ずっと、ずっと瑠璃に逢っていなかったような…

「ちよつとあんた何泣いてんのよ？」

『…………お前だつて顔真っ赤。』

「っ！！？うつさいわね！あんたが耳元であんなこと…」

「あんなことつて？」

『わかつていつてんでしょ！？……………それと…』

「それと…………？」

『罪滅ぼしのための愛なんていらない。私を見て、それで……………わ、私をちゃんと…………その…あ、愛して…欲しい……………』

ガバッ！…！

俺は瑠璃を力一杯抱き締めた。

『ちよつと…痛…痛い……………』

「大好きだ瑠璃。もう二度と手放さない…一生守り続けるから…」
『……………んっ。』

それから俺たちは長い……長い口付けを交した。まるで神様に誓いをたてるように……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1427b/>

記憶喪失んでれ

2011年1月20日23時05分発行